様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１８５０３

研究課題名（和文）日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究

研究課題名（英文）Study of Listening Comprehension of Japanese Learners Aiming to Develop a Japanese Dictionary for Listening

研究代表者
野田　尚史（Noda, Hisashi）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授

研究者番号：２０１４４５４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,000,000円

研究成果の概要（和文）：　さまざまな日本語学習者を対象に，日本語の日常会話の音声を聴いてもらい，学習者がどのように誤って聴き取っているのかを調査した。その結果から次のような聴き誤りのタイプを明らかにした。
(1) 音声の混同：「手配したのです」を「でかい人です」と聴き取る，(2) 音声の脱落：「周り」を「マリ」と聴き取る，(3) 音声の添加：「所作」を「しょうさ」と聴き取る，(4) 不適切な区切り：「もう嬉しい」を「もくれしい」と聴き取る

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語を母語としない日本語学習者が日本語の日常会話を聴き取るとき，既存の辞書はあまり役に立たない。わからない表現を辞書で調べても，辞書に載っていないことが多いからである。
本研究では日本語学習者を対象にした調査によって，学習者にとってどのような語句を聴き取るのが難しいのか，また，どのような語句をどのように聴き誤るのかを明らかにした。この研究成果は日本語学習者用の聴解用辞書の開発に役に立つ。

研究成果の概要（英文）：In this study various Japanese learners were asked to listen to Japanese daily conversations and describe what they understood. From the data collected, we found the following types of misunderstandings: (1) confusion of sound: e.g. “tehai sita no desu” is misunderstood as "dekai hito desu”, (2) drop of sound: e.g. “syosa” is misunderstood as syoosa”, (3) addition of sound: e.g. “syosa” is misunderstood as "syoosa”, (4) inadequate segmentation: e.g. “moo uresii” is misunderstood as "mokuresii”.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語　学習者　聴解　辞書　聞き誤り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は，日本語を母語としない日本語学習者が日本語の日常会話を聴き取るとき，既存の辞書はあまり役に立たないという状況であった。聴き取ったわからない表現を辞書で調べても，それが辞書に載っていないことが多かったからである。その状況は現在でも基本的に変わっていない。

日本語学習者についての研究の中では，会話や作文という産出技能の研究に比べて，聴解や読解という受容技能の研究は遅れていた。受容技能についての研究の中でも，聴解の研究は読解の研究に比べて少なかった。日本語学習用の辞書についての研究もあまり行われていなかった。

そのような状況で，日本語学習者にとって有用な聴解用辞書を作成するためには，学習者がどのような音声を聴き取るのが難しいのか，また，どのような音声をどのように聞き誤るのか，さらに学習者はどのような表現で辞書を調べたいのかを調査することが必要だと考え，本研究を開始した。そうした研究をもとにすれば，学習者が辞書で調べたいと思う表現を辞書に掲載できるようになると考えたからである。

２．研究の目的

日本語学習者が日本語の日常会話を聴き取るとき，既存の辞書があまり役に立たない主な原因は，学習にとってわからない表現が辞書に載っていないことである。わからない表現を辞書で調べても見つからないのは，具体的には(1)の場合と(2)の場合が多い。

(1) 学習者が日本語の音声を正確に聴き取っていない。

(2) 日常会話に使われる表現が辞書に登録されていない。

(1)は，「しょうが」を「しょが」と聴き取り，「しょが」を辞書で調べても「書画」しかなく，該当しそうな意味が見つからないというような場合である。学習者が正確に聴き取れないことが多いものとして，「井戸」を「糸」と聴き取るような音声（有声音と無声音など）の混同や，「真っ赤」を「マカ」と聴き取るような音声（長音や促音など）の脱落などが考えられる。ただ，詳しい調査は行われていない。

(2)は，日常会話で使われる「ここんとこ」のような表現を辞書で調べても，辞書には登録されていないというような場合である。辞書に登録されていない表現というのは，「やれば」が「やりゃ」になっている縮約形や，「駐車禁止」が「チューキン」になっている略語，「1980（円）」が「イチキュッパ」になっている俗語などが考えられる。ただ，これも詳しい調査は行われていない。

これらの問題を解決するためには，学習者が誤って聴き取りそうな語形や，実際の日常会話には出て語句で学習者が辞書で調べそうなものを辞書に載せておくとよいということになる。しかし，学習者が誤って聴き取りそうな語形や，学習者が調べたい語句についての調査は，これまでほとんど行われたことがない。

本研究の目的は，日本語学習者にとって有用な聴解用辞書を作成するための基礎データを得るために，(3)から(5)について調査し，その結果をできるだけ体系的に整理することである。

(3) 日本語学習者はどのような音声を聴き取るのが難しいのか？

(4) 日本語学習者はどのような音声をどのように聞き誤るのか？

(5) 日本語学習者ははどのような表現を辞書を調べたいのか？

３．研究の方法

研究の方法としては，これまでほとんど行われたことがない(6)と(7)の２つを使った。

(6) 音声調査：日本語学習者に日常会話の音声を聞いてもらい，学習者がその音声をどのように聴き取っているのかを調査する。この調査によって，学習者はどんな音声が聴き取れないのか，また，どのように誤って聴き取っているのかを明らかにする。

(7) 文字調査：「名大会話コーパス」や「談話資料　日常生活のことば」など，文字化された日常会話を日本語学習者に読んでもらい，学習者はどのような表現がわからないのか，また，学習者はどのような見出しで辞書を調べるのかを調査する。この調査によって，日常会話で使われるのに辞書に登録されていない表現を明らかにする。

当初は時間と労力がかかる(6)の方法による調査は少なめにし，時間と労力がそれほどかからない(7)の方法による調査を中心にすることを考えていたが，実際に(6)と(7)の方法による調査を行ってみると，明らかに(6)のほうが学習者の聴き取りの実態をより正確に捉えられることが判明した。そのため，(6)の方法を中心に調査を進めた。(7)の方法による調査は，文字化されているものを録音してそれを聞いてもらうことにして，(6)と同じように学習者の聴き取りの実態を正確に捉えられるようにした。

調査は，日本国内と海外で行った。国内では，中国語母語話者とベトナム語母語話者を中心に調査を行った。海外では，台湾，ミャンマー，ドイツ，オランダで調査を行った。ベトナムでの調査も準備は整っていたが，新型コロナウイルスの感染拡大の影響で実施できなかった。

４．研究成果

主な研究成果は，大きく(8)と(9)の２つに分けられる。

(8)　日本語学習者はどのような音声をどのように聞き誤るのかを明らかにした。

(9)　日本語学習者のための聴解用辞書にどんな語句を掲載すればよいかを明らかにした。

(10) 聴解用辞書の音声表記に使用するために，各言語の表記に合わせた日本語音声表記を提案した。

(8)の「日本語学習者の聞き誤り」については，主なものとして(11)から(14)のような聞き誤りのタイプがあることが明らかになった。

(11) 音声の混同：「手配したのです」を「でかい人です」と聴き取るようなタイプ。有声音と無声音の混同のような典型的なもの以外に，さまざまな混同が見られる。

(12) 音声の脱落：「周り」を「マリ」と聴き取るようなタイプ。長音や促音のような特殊拍の脱落のような典型的なもの以外に，さまざまな音声を脱落させて聴き取っている事例が見られた。

(13) 音声の添加：「所作」を「しょうさ」と聴き取るようなタイプ。「音声の脱落」よりは少ないが，特殊拍を中心に音声を添加して聴き取っている事例が見られた。

(14) 不適切な区切り：「もう嬉しい」を「もくれしい」と聴き取るようなタイプ。２語以上にまたがる聞き誤りであり，「音声の混同」や「音声の脱落」「音声の添加」と複合している場合もある。

(9)の「聴解用辞書に掲載すべき語句」については，学習者の聞き誤りに対応して，(15)から(18)のような語句を辞書に掲載する必要があることが明らかになった。

(15) 音声の混同に対応して：「ひんど」を辞書で調べたときに「頻度」だけでなく「ヒント」も候補として出てくるような対応が必要である。実際にはない「とっとした」を辞書で調べたときに「ほっとした」が候補として出てくるような対応も必要である。

(16) 音声の脱落に対応して：「とげい」を辞書で調べたときに「陶芸」も候補として出てくるような対応が必要である。音節を脱落させるのではなく子音だけを脱落させて聴き取ることもあるので，「まゆえ」を辞書で調べたときに「まゆげ」が候補として出てくるような対応も必要である。

(17) 音声の添加に対応して：「こくどう」を辞書で調べたときに「国土」も候補として出てくるような対応が必要である。音節を添加させるのではなく子音だけを添加させて聴き取ることもあるので，「はらし」を辞書で調べたときに「あらし」が候補として出てくるような対応も必要である。

(18) 不適切な区切りに対応して：「わする」を辞書で調べたときに「500 万以上はする」のような「はする」も候補として出てくるような対応が必要である。音声を混同・脱落・添加させるほか融合させて聴き取ることもあるので，「しんごうきゃ」を辞書で調べたときに「信号機や」が候補として出てくるような対応も必要である。

「聴解用辞書に掲載すべき語句」については，そのほか「麻布十番」「タカラトミーアーツ」のような固有名詞や，「ちゃいます」「それやから」のような方言も学習者にとって聴き取りが難しいことが明らかになった。学習者にとっては聴き取った音声が固有名詞や方言であるかどうかはわからないことが多い。一般的な辞書には載っていないそのような語句も，「ざぶじゅうばん」「たからとりあえず」など聞き誤りやすい語形とともに辞書に掲載する必要がある。

(10)の「各言語の表記に合わせた日本語音声表記」については，英語，スペイン語，中国語，韓国語の音声と表記の関係に合わせて日本語の音声を表す表記法を提案した。日本語のひらがなやカタカナ，漢字を学習しなくても，日本語の音声を聞いて，母語の表記法に合わせて日本語の音声を入力できるようにするためである。たとえば，英語アルファベットによる日本語音声表記では［セート］（生徒）を「seh-eh-toh」と表記し，スペイン語アルファベットによる日本語音声表記では［ハガキ］（葉書）を「jagáquí」と表記し，中国語漢字による日本語音声表記では［コーカ］（効果）を「扣喔咖」と表記し，韓国語ハングルによる日本語音声表記では，［ヒツヨー］（必要）を「히츠요오」と表記するものである。

このような研究成果は，将来，日本語学習者に有用な聴解用辞書を編集するときの基礎資料として役に立つはずである。

今後は，収集されたデータでまだ整理が終わっていないものの分析を進め，さらに詳細に，かつ体系的に日本語学習者の聴解実態を明らかにしていく。そして，その成果を口頭発表や論文として公表していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 野田尚史・宮崎聡子	４．巻 21
２．論文標題 韓国語ハングルによる日本語音声表記	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野田尚史・高澤美由紀	４．巻 19
２．論文標題 スペイン語アルファベットによる日本語音声表記	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 139-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002833	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野田尚史・島津浩美	４．巻 17
２．論文標題 中国語漢字による日本語音声表記	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 75-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野田尚史・中北美千子	４．巻 15
２．論文標題 英語アルファベットによる日本語音声表記	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 135-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00001600	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 19
2．論文標題 学習者は現実の日本語をどのように聞きとっているか？―背景知識の不足による聴解の難しさを中心に―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 BATJ Journal	6．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 18(2)
2．論文標題 日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか―「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 -
2．論文標題 聴解・読解における日本語のバリエーションの難しさ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大島弘子(編)『フランス語を母語とする日本語学習者の誤用から考える』ひつじ書房	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石黒圭・田中啓行	4．巻 108
2．論文標題 日本語学習者の講義理解に見られる話段と中心文 ―人文科学系講義の理解データの分析から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 表現研究	6．最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 10
2．論文標題 学習者の習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日語教育与日本学	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 10
2．論文標題 日本語学習者のコミュニケーションに必要な多様な能力	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日中言語研究と日本語教育	6．最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　13件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 野田尚史
2．発表標題 理想的な日本語学習用辞書を求めて―母語話者と非母語話者の協力の必要性―
3．学会等名 上海外国語大学創立70周年記念「新しい時代における日本言語文学研究フォーラム」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 高澤美由紀・野田尚史
2．発表標題 スペイン語アルファベットによる日本語音声表記
3．学会等名 SELE2019 (Seminario de Linguistica Espanola de Japon)
4．発表年 2019年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想
３．学会等名 公開シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて―中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発―」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 野田尚史・中島晶子・村田裕美子・中北美千子
２．発表標題 日本語学習者の聴解困難点調査に基づく「わかりやすい日本語」の提案
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（2020年開催から延期）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語学習者の聴解困難点
３．学会等名 アジア人材還流学会ハノイセミナー2022（2020年開催から延期）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 石黒圭
２．発表標題 ベトナム人日本語学習者の語彙習得
３．学会等名 国際シンポジウム2019「グローバル時代における人文学の日越協力」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想
３．学会等名 国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて―学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ―」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語教育の実践から出発する日本語文法研究
３．学会等名 2018年日本語教育とシラバスデザイン研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語のコミュニケーション教育に必要な言語技術
３．学会等名 スイス日本語教師の会 春のセミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石黒圭
２．発表標題 日本語学習者の言語運用の不思議 ―学習者コーパスから見えてくるもの―
３．学会等名 NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語学習者の聴解・読解における日本語のバリエーションの難しさ
３．学会等名 日本語・日本語教育研究会「日本語のバリエーションと日本語教育」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語学習者の聴解困難点と聴解技術
３．学会等名 平成29年度国立国語研究所日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか―聴解・読解の困難点とその指導―」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 非母語話者が日本語を「聞く」「読む」ための文法
３．学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア―談話研究・対照研究・習得研究を中心に―」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか―「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓―
３．学会等名 日本語文法学会第18回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 野田尚史
２．発表標題 学習者は現実の日本語をどのように聞きとっているか？
３．学会等名 英国日本語教育学会 第20回BATJ年次大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 野田尚史・阪上彩子・中尾有岐・太原ゆか
２．発表標題 実生活に役立つ初級聴解ウェブ教材の作成
３．学会等名 The 7th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese（CASTEL/J 2017）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語非母語話者の聴解コーパス https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/choukai/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松崎　寛 (Matsuzaki Hiroshi) (10250648)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石黒　圭 (Ishiguro Kei) (40313449)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授 (62618)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	北京日本学研究センター			
その他の国・地域	東呉大学（台湾）			
ドイツ	ミュンヘン大学			
オランダ	オランダ国立南大学			